

# 災害・被ばく医療科学共同専攻での学びから得たもの そして今後への決意

Obtained from learning in disaster and radiation exposure  
medical sciences joint degree and determination to the future

田中 祐大

Yudai TANAKA

長崎大学病院

Nagasaki University Hospital

---

2011年3月11日、東北にて未曾有の大震災が起きた時、テレビで映る津波の様子をただ眺めているだけだった私は、看護師2年目へ突入するとともに、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科災害・被ばく医療科学共同専攻1期生への入学を決め、放射線看護や災害看護に関して深く学んだ。その学びや現在の状況、今後の展望や決意についてシンポジストとして述べさせていただいた。

私は、入学当時は耳鼻咽喉科病棟で働きながら大学院生活を過ごしており、看護師2年目として業務や知識・技術の習得をしながらの大学院生活は想像以上に大変であった。しかし一方で、講義中は部署の違う先輩看護師や職種の違う専門職の方たちとディスカッションを重ねることで、その知識を実際にそのまま臨床で活かすことができ、インプットとアウトプットのサイクルができたことで有意義な2年間となったことを強調して述べた。

さらに、在学中に取り組んだ修士論文に関して述べた。日々の頭頸部がん患者への看護実践から疑問や課題を見つけ出し、放射線治療を受ける患者の家族の放射線被ばくや治療に対する思い・認識として、対象者のもつ放射線の捉え方や放射線のもつイメージを明らかにした。

この課題研究へ取り組むことによって、結果のみならず研究のプロセスにおける学びが現在の臨床での活動においても活かせるものとなっている。例として、病棟において、研究への取り組み方がわからないスタッフの手助けを行い、文献検討の方法や研究計画書の作成などのプロセス段階アドバイスを行ったこと、また、課題研究で明らかになった結果を病棟スタッフと共有することで他のスタッフの放射線治療を受ける患者や家族に対する看護へ貢献できることを述べた。

最後には、今後の展望・決意として、今後も継続して放射線に関する講習会等に積極的に参加しながら、看護師としての技術・知識を高めつつ、放射線看護に関しての学びも深めていくこと、さらに、次の世代に伝えていけるように、つまり、放射線看護学という分野において、指導者・教育者として今後は貢献したい、という決意を述べた。

会場からは、災害看護だけではなく、臨床の放射線看護に関しても注目し、学びを深められていることに対して評価をいただいた。

他のシンポジストや会場の意見もさまざまであり、今後の活動に活かしていきたい。